

# 旧長瀬綜合博物館からの寄贈資料

## —富山県氷見市朝日貝塚の骨角器—

倉澤麻由子

### 1 はじめに

平成25年の財団法人長瀬綜合博物館の解散に伴い、同博物館の所蔵資料の埼玉県への寄贈が決定した。長瀬綜合博物館は、眼科医の塩谷覚三郎氏が長年収集した考古資料や自然石などを保存、展示するための施設として昭和32年に発足した。収蔵資料は、考古・歴史・自然といった各分野に及んでおり、重要文化財の「十鈴鏡」や県指定文化財の「古瓦」、「笑う埴輪」などが展示されていた。これらの資料は、専門分野ごとに各県立博物館が受け入れることになり、さきたま史跡の博物館は考古資料を受け入れることになった。

当館が受け入れた資料は土器や石器、埴輪から骨角器まで幅広い種類のものであった。資料は、注記が施されて出土遺跡がわかるものや、注記がないものなど様々であったが、骨角器は出土遺跡や発掘された年代が明記されたキャプションが伴っていた。

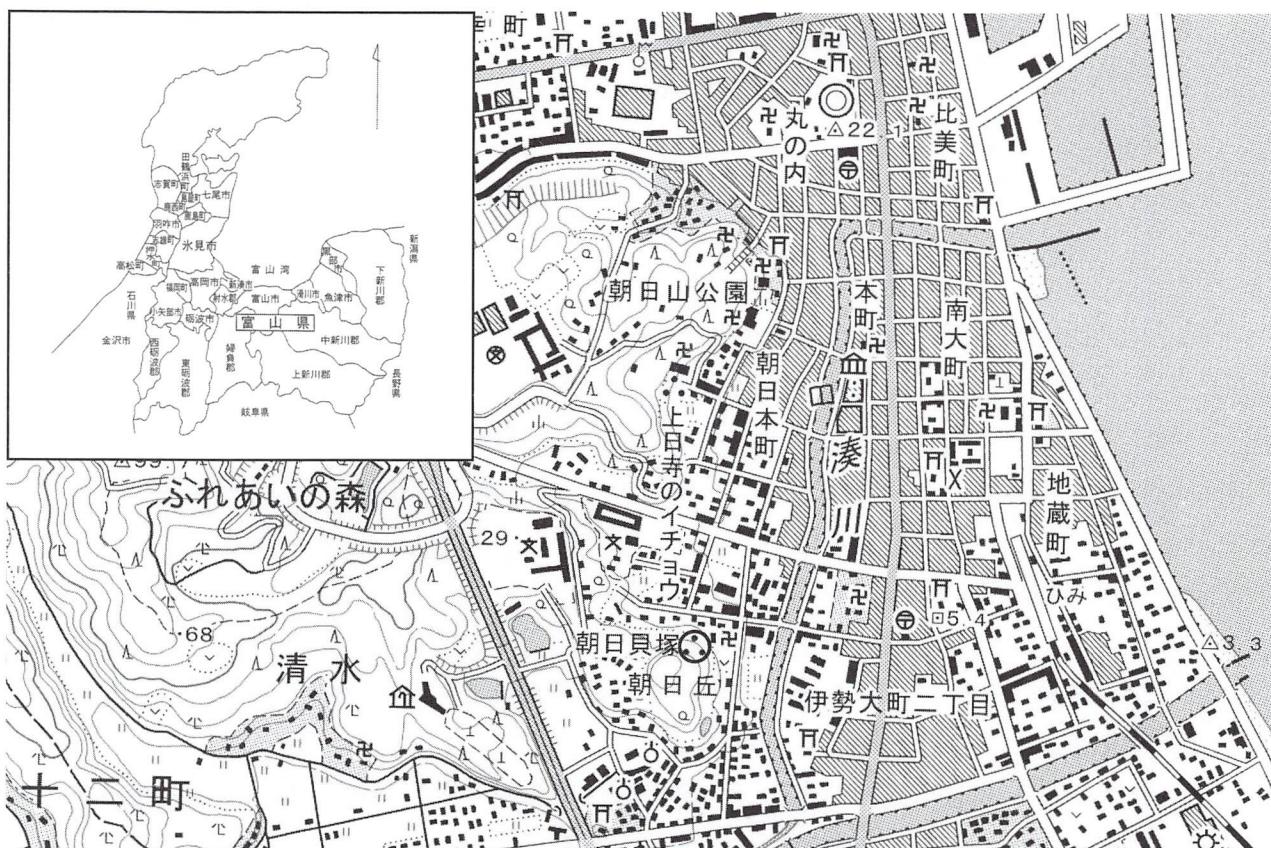
これらのキャプションを調べると、骨角器は富山県氷見市朝日貝塚や岩手県大船渡市下船渡貝塚など著名な貝塚出土の資料が多いことが分かった。本来なら全ての資料を紹介したいところではあるが、数が多く出土遺跡も数遺跡あることから、今回は朝日貝塚に絞って資料を紹介したい。

### 2 富山県氷見市朝日貝塚について

朝日貝塚は、富山県の西北部に位置し、能登半島の基部東側にあたる氷見市に所在し、市街地の南西部にある。朝日山丘陵の東南端、標高33mの潟山と呼ぶ丘の東麓台地にある。この台地は、東西が北部で広く南部で狭まる標高が丘陵裾で約7mの低台地である。現在の汀から直線距離で約800mの位置にある。遺跡の継続時期は縄文時代前期から中世に及ぶ。日本海側の数少ない縄文時代の鹹水貝塚として周知されており、大正11年に国指定史跡に指定されている（第1図）。

朝日貝塚は、大正7年7月誓度寺の移転建築のため、氷見郡氷見町朝日字馬場内を地均しましたところ、貝殻や土器片が多数出土したことから発見された。同年6月に氷見郡宇波村大境の洞穴内で人骨や土器が多数出土し、東京帝国大学助手柴田常恵が7月と9月から10月にかけて調査を実施したのち、朝日貝塚の調査も行った。また大正10年にも朝日貝塚の調査が行われている。この調査で朝日貝塚の概要が明らかになり、大正11年に貝塚としては、初めて史跡として指定を受けた。

大正11年に史跡に指定されたが、同年に誓度寺が火災で焼失した。誓度寺は大正13年に再建されることになったが、それに先立って発掘調査が実施された（第2図）。この調査には、当時内務省史蹟名勝天然紀念物調査会考查委員であった柴田常恵と内務省嘱託田澤金吾が出張している（氷見市教育委員会1995）。

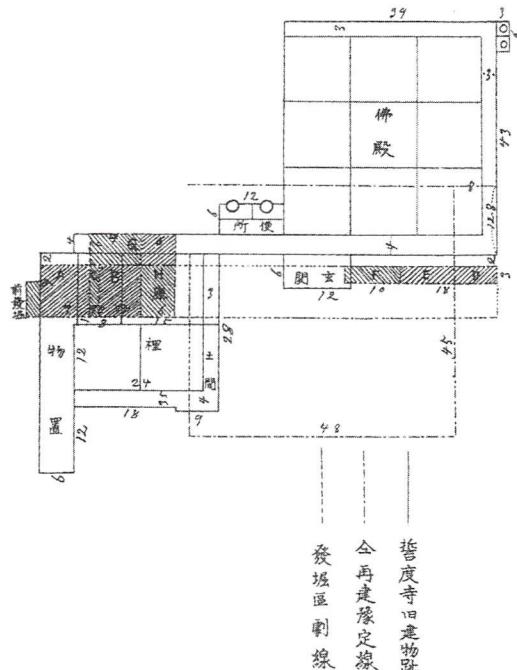


第1図 氷見市朝日貝塚位置図 (1:25000)

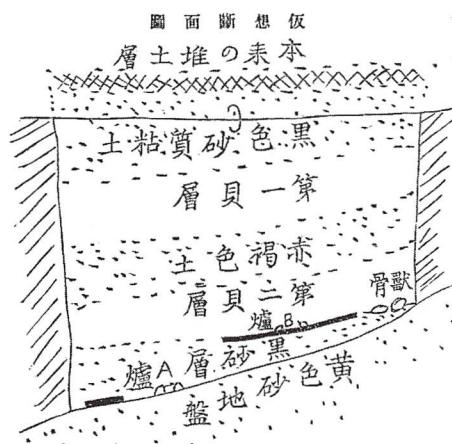
この調査では、縄文時代前期と中期の炉を持つ住居跡2軒が重複して検出された（第3図）。この住居跡は炉跡を持つ住居跡としては、国内最初の発掘例として知られている。また、骨角器は有孔大針状骨器、小針状骨器、笄状骨器の3点が図と共に紹介されている（第4図）。有孔大針状骨器と笄状骨器は第1貝層からの出土である。一緒に出土した土器から縄文時代中期の資料と判明している。出土した資料は、柴田によって内務省に送られた（大村・林1924）。

今回、寄贈された骨角器の内、朝日貝塚の骨角器は笄2点、大針1点、骨鏃1点、ヤス状刺突具2点、刺突具1点、用途不明骨角器1点の計8点である。これらの骨角器に「富山県氷見郡朝日貝塚 大正13年」と書かれたキャプションが伴っていた。そのため、当館に寄贈された朝日貝塚出土の骨角器は、柴田が内務省に持ち帰った大正13年の調査で出土した資料の可能性が高い。

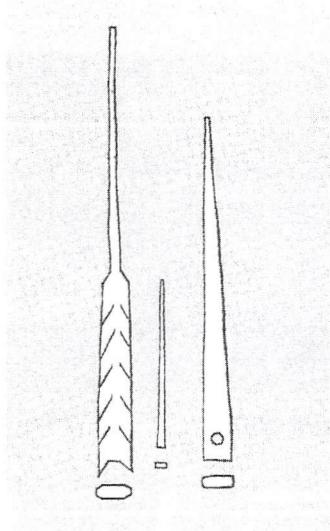
さらに大正13年の調査について調べてみると、國學院大學日本文化研究所が柴田常恵の写真資料や野帳などを一括して保存している事がわかった。同研究所は、柴田常恵の写真資料をまとめて写真目録として発行している。その中には、朝日貝塚の発掘写真も掲載されている。残念ながら、当館に寄贈された骨角器の出土状況がわかる写真は掲載されていなかった。しかし遺物写真の1枚に、朝日貝塚出土の笄の内、最も装飾が施されている笄と同一資料と考えられる笄が撮影されている。写真には出土遺跡などの説明はないが、同一資料と考えて間違いないだろう（第5図）。



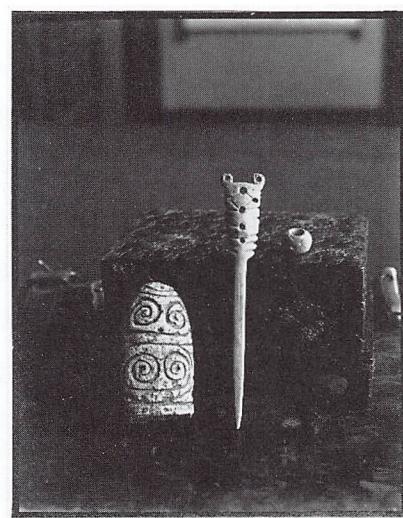
第2図 大正13年朝日貝塚発掘調査地区  
(大村・林1924)



第3図 大正13年朝日貝塚  
住居跡堆積土層 (大村・林1924)



第4図 大正13年発掘調査  
出土骨角器 (大村・林1924)



第5図 柴田常恵撮影遺物写真  
(國學院博物館所蔵)

第5図の中央の笄が、朝日貝塚出土の笄と思われる。一緒に写っている石剣の先端と骨製玉も、当館に寄贈された資料と同一資料と考えられるが、これらの資料は別の遺跡名のキャプションが伴っているため、今回は報告しない。稿を改めて報告したいと思う。

### 3 寄贈された朝日貝塚出土の骨角器

以下、個々の資料について記載していく（第6図）。なお、器種名及び部位名は『東京国立博物館所蔵 骨角器集成』（東京国立博物館2009）及び『骨角器の研究 繩文編I』（金子・忍沢1986）を参考にした。

1は笄である。全長13.9cm。頂部が幅広の四角形で頂端部が2つの円形の突起状になる。穿孔と彫刻で幾何学的な文様を描いている。沈線の彫刻はサイドにまで施されていて、精巧に作られている。横方向に丁寧に磨かれている。

2は笄である。全長20.1cm。湾曲しており、頂部から縦方向と頂端直下の横方向に開孔がある。2つの開孔は連結しておらず、それぞれ独立している。表面の風化が進んでおり、磨きの方向は確認できない。

『東京国立博物館 骨角器集成』では、串状の湾曲し頂部に穿孔がある骨角器を、用途は不明としながらも棒状垂飾とし、笄とは異なる器種としている。2の形状は、この棒状垂飾に似ているが2つの開孔は連結していない。頂部からの縦方向の開孔と頂端部直下の横方向の開孔がある棒状垂飾は、2つの開孔が連結し斜行穿孔となる。そのため、開孔が連結していない2は棒状垂飾ではなく笄とした。しかし斜行穿孔の棒状垂飾の未成品の可能性はあるだろう。

3は大型針である。全長18.5cm。皮革や布などを縫い合わせる「縫い針」としての機能が推定される。頂部にかけて幅広になり、穿孔されている。全長が18.5cmで平たい作りをしている。横方向に丁寧に磨かれている。

1924年の大村正行・林喜太郎の報告には、頂部に穿孔が施された細長い骨角器が掲載されており、有孔大針状骨器として報告されている（大村・林1924）。同一資料の可能性がある。

4はヤス状刺突具である。全長6.5cm。先端が鋭利に尖っている。基部は先端に比べると、尖りが緩やかである。横方向に丁寧に磨かれている。

5はヤス状刺突具である。全長11.6cm。管状の骨を半裁して先端を尖らせている。基部は斜めに割れている。横方向に磨かれている。

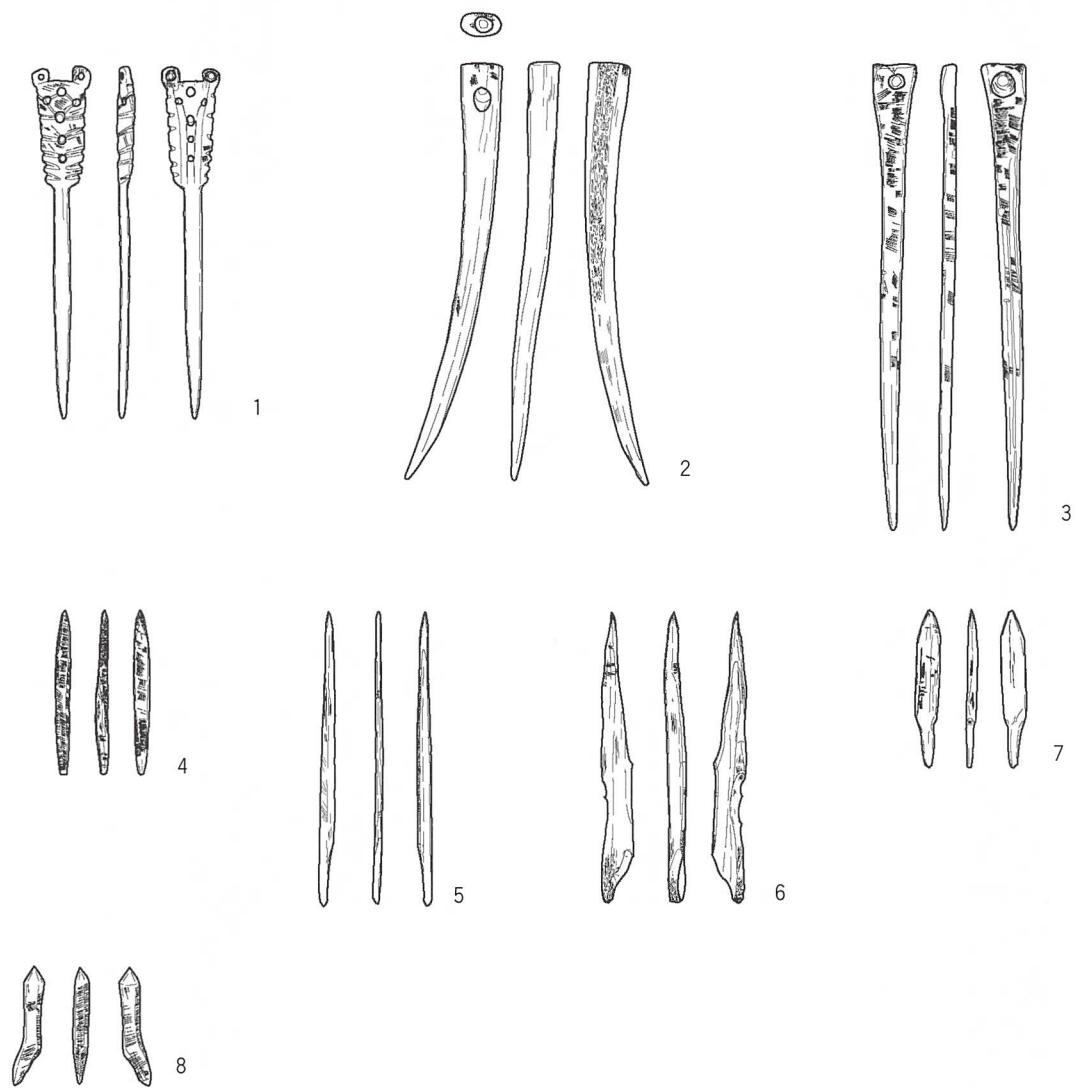
6は刺突具である。全長11.4cm。先端が鋭利に尖っている。基部は一部が欠損しているため、形態は不明である。ヤス状刺突具は長い柄に取り付けるため両端を尖らせるが、6は基部の部分が幅広くなる。そのため、ヤス状刺突具とは区別し、刺突具とする。

7は骨鏸である。全長6.2cm。基部がくびれている。器体は扁平だが、基部は三角形状を呈している。

8は用途不明の骨角器である。全長3.1cm。「く」の字をした小型の骨角器である。先端の片方が鋭利に尖っており、もう片方は扁平になっている。横方向に丁寧に磨かれている。欠損部位もなく、最初からこの形を意識して作られている。

「く」の字に曲がっている小型の骨角器は、挟み込み式ヤスの器体に接合した逆刺という説や有尾刺突具という説がある。逆刺は全体の形が「く」の字状を呈し、一方の断面形で、もう一方が半円または扁平な形をする。扁平な断面をする側にアスファルトが付着し挟み込み式ヤスの器体に接合したものと考えられている（金子・忍沢1985）。

有尾刺突具は「ノ」の字状をした刺突具で、ノの字状の尾部が尖り逆刺の役割をしたと考えら

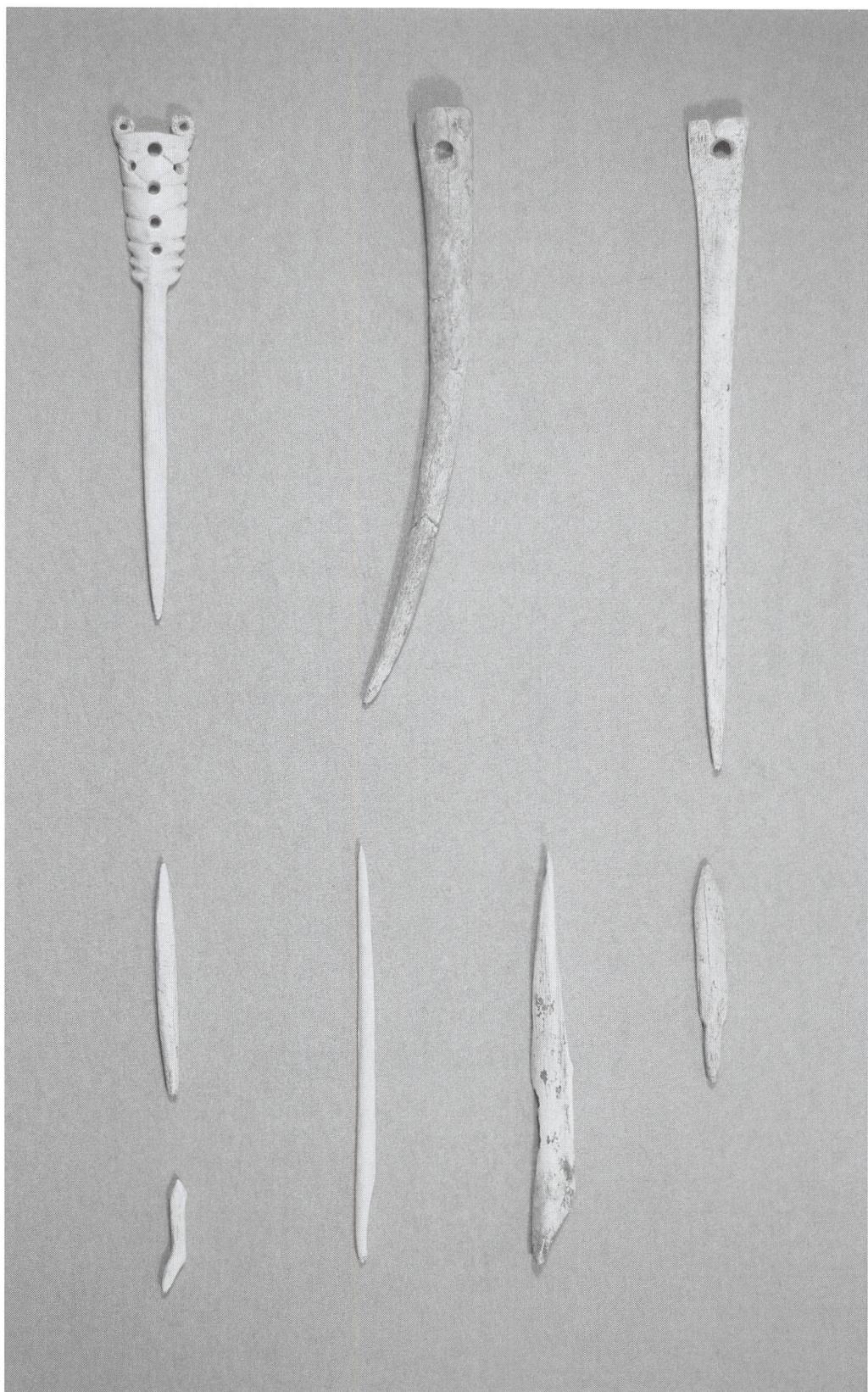


1 ~ 7 : S=1/3 8 : S=1/2

第6図 朝日貝塚出土骨角器実測図

番号	全長 (cm)	幅 (cm)
1	13.9	2.3
2	20.1	1.7
3	18.5	1.8
4	6.5	0.6
5	11.6	0.5
6	11.4	1.2
7	6.2	1.0
8	3.1	0.5

第1表 朝日貝塚出土骨角器計測表



図版1 朝日貝塚出土骨角器

れている（横浜市歴史博物館2016）。

逆刺と考えるならば、本体との接合部分に接合するためのアスファルトが付着していたり、紐で縛って接合するための擦痕が残ったりすると思われるが、8にはそのような痕跡は見当たらない。また、有尾刺突具は屈曲が8に比べると緩やかなため、有尾刺突具と断定することは難しい。そのため、今回は用途不明の骨角器とする。

骨角器は機能や用途が不明のものも多く、形態的な特徴から分類されるため分類作業が難しい。例えば、笄と針は同じく串状をしており、全長も似ている。区別するのは困難である。大枠としては、頂部の装飾があるものを笄とし、ないものを針としている。そのため、今回は1を笄とし3を針とした。1を針として使用することは不可能だと思うが、3の大針で髪をまとめることは可能である。串状の頂部に装飾のほとんどない資料は、針と笄の両方の可能性を考慮する必要があるだろう。また3のような頂部に穿孔のある串状の骨角器は刺突具と報告されるケース（町田2007）もあり、現状では笄や針、刺突具を完全に区別することは難しい。

#### 4 朝日貝塚周辺の骨角器

寄贈された骨角器の出土遺跡を把握する手掛かりは注記とキャプションだけである。骨角器は貝塚や低湿地など出土する遺跡が限られるため、出土量は決して多くない。また土器のように時期的、地域的な特徴が顕著ではないため編年を組んだり、地域差を求めたりすることが難しい。寄贈資料を観察しただけではわからないことも多いため、富山県を中心に北陸地方の縄文時代の骨角器について調べてみることにした。

朝日貝塚出土の骨角器で特徴的な資料としては、精巧な装飾が施された1の笄や、湾曲した2の笄が挙げられる。そこで、この2点の笄を中心に、周辺の遺跡から出土した骨角器について調べてみることにした。

北陸地方の骨角器研究は、それほど多くはなく、貝塚の調査報告書等で記載されているものがほとんどである（町田2007）。骨角器が出土しやすい貝塚の調査が、関東や東北地方に比べて少ないことが理由として挙げられるだろう。日本海側は太平洋側に比べて、潮の干満が少ないため貝塚が少ないと言われている（山内1934）。福井県鳥浜貝塚や富山県小竹貝塚など大型の貝塚の調査も進められているが、全体的に小規模な貝塚が多い。また、今まで貝塚と認識されていなかった内陸の遺跡から貝層が検出されることもあり、日本海側の縄文海進について把握できれば、その縁辺の貝塚を探し出すことも可能ではないだろうか。

朝日貝塚も貝層は薄く、貝塚としての規模は小さい。北陸地方の代表的な貝塚の在り方といえるだろう。

骨角器が出土した貝塚で朝日貝塚の周辺貝塚は、朝日貝塚よりさらに内陸の氷見市上久津呂中屋敷跡遺跡や日本海側の最大級の貝塚と言われる富山市小竹貝塚が挙げられる。どちらも縄文時代早期～前期にかけての貝塚で、朝日貝塚より古い貝塚である。

上久津呂中屋敷跡遺跡は貝塚と認識されていなかったが、2005年に能越自動車道建設のための緊急調査により貝層が部分的に認められた。カキやサルボウ、獸骨や魚骨が出土しているが、貝層の厚さは20cm程度と薄く混貝土層であった。



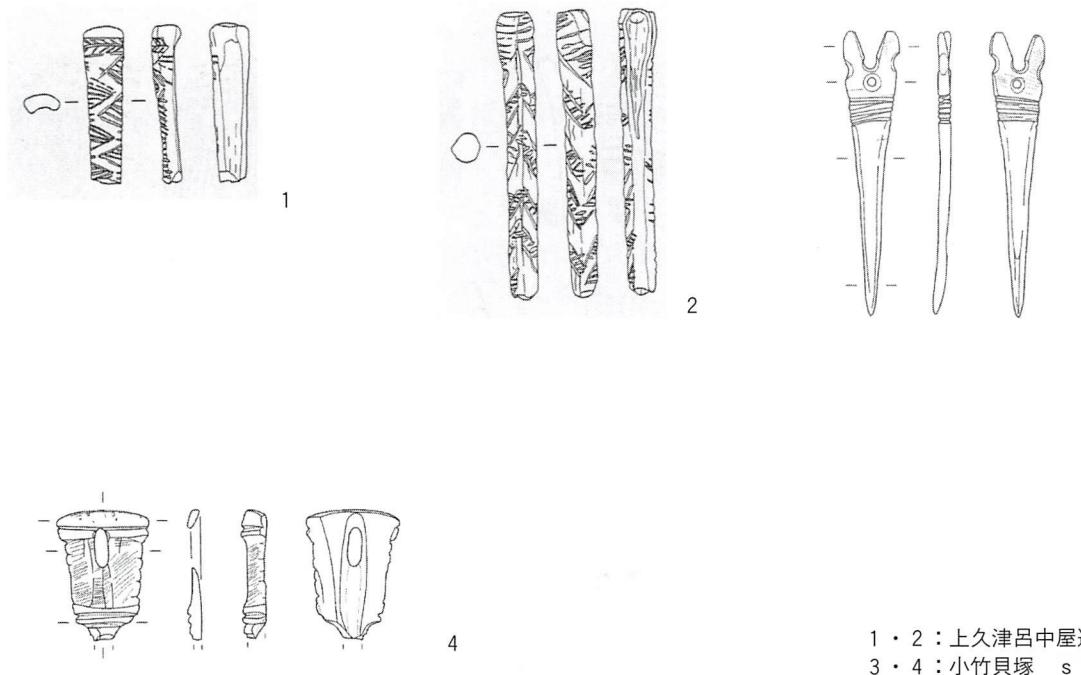
第7図 北陸地方の貝塚分布（町田・杉山2007）より一部抜粋

骨角器は、ヤス状刺突具や笄、垂飾が出土している。笄は、鋸歯状彫刻を持つ串状をしている（第8図-1・2）。

小竹貝塚は北陸新幹線の建設に伴い調査が行われた。大型の貝塚で日本海側の代表的な大規模貝塚である。ヤス状刺突具や針などの生産道具から笄や垂飾、貝輪などの装飾品まで様々な骨角器が出土している。小竹貝塚から出土している笄の中には、朝日貝塚から出土した笄のような台形の頂部の笄や頂部が2つの突起状になる笄が出土している（第8図-3・4）。時期は違うが、富山湾内に朝日貝塚出土の笄と似た形態の笄が出土している点は注意したいと思う。

朝日貝塚と同時期の骨角器が出土した貝塚は、石川県羽咋市四柳貝塚やかほく市上山田貝塚などが挙げられ、富山県内では見つかっていない。上山田貝塚では、ヤス状刺突具や針、穿孔のある垂飾が出土しているが、朝日貝塚の笄のような資料は出土していない。四柳貝塚も同様である。

このように北陸地方の骨角器研究は、出土量が少ないとから関東や東北地方の沿岸部に比べると、あまり進んでいないのが現状と思われる。しかし、小竹貝塚のように骨角器が多数出土している遺跡もあることから、資料の増加も見込まれるだろう。



1・2：上久津呂中屋遺跡 S:1/2  
3・4：小竹貝塚 s:2/3

第8図 朝日貝塚周辺貝塚出土骨角器

## 5まとめ

旧長瀬綜合博物館からの寄贈資料は膨大な量で、出土地が不明のため考古学的な価値の低い資料や、後世に作られた可能性の高い資料などもある。その中で骨角器は出土した遺跡名と年号の記載があったため、確認のために調査履歴を調べることにした。調査の過程で、旧長瀬綜合博物館所蔵の骨角器は柴田常恵に関係する資料という事が判明した。

これらの骨角器が出土した遺跡の多くが、現在は国指定史跡に指定されている貝塚である。大正13年当時、柴田は内務省の史蹟名勝天然紀念物調査会の考查員であった。出土資料が柴田の手元にあったという事は、史跡に指定するための確認調査を考查員が現地に赴いて、視察しただけではなく実際に指揮していたのであろう。戦前の史跡指定の方法の一端を垣間見ることができたのは、国指定史跡埼玉古墳群を管理するさきたま史跡の博物館の学芸員として、参考になった。

また、朝日貝塚は戦前に史跡に指定されたことで、開発が行われず発掘調査もあまり行われていない。これは文化財保護の観点から考えると非常に素晴らしいことである。しかし、同時に出土資料が少ないとも言える。そのため、今回報告した朝日貝塚出土骨角器は、朝日貝塚の学史上貴重な資料と考えられる。今回は、この資料がどのような経緯で旧長瀬綜合博物館に展示されるようになったのかはわからなかったが、その経緯が分かれば、資料の信憑性もさらに増すと思われる。

長年にわたり、資料を保存・展示してきた旧長瀬綜合博物館の精神を受け継ぎ、寄贈された資料を今後とも保存・管理し、展示や普及活動など様々な形で活用していきたい。

#### 《引用・参考文献》

- 石川ゆづは 2005 「上久津呂中屋敷遺跡 下層」『埋蔵文化財調査概要－平成16年度－』（財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
- 宇ノ木町教育委員会・石川考古学研究会 1979 『上山田貝塚 石川県河北郡宇ノ木町上山田遺跡調査報告』
- 大村正行・林喜太郎 1924 「朝日貝塚発掘調査報告」『富山県史跡名勝天然記念物調査報告 第六號』  
富山県
- 金子浩昌・忍澤成視 1986 『骨角器の研究 繩文篇Ⅰ』慶友社
- 東京国立博物館 2009 『骨角器集成』
- 氷見市教育委員会 1995 『朝日貝塚Ⅰ－範囲確認試掘調査概要（1）』
- 氷見市教育委員会 2002 『氷見市史 資料編五 考古』
- 町田賢一・杉山大晋 2006 「北陸地方における貝塚のあり方」『富山考古学研究 第9号』（財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
- 町田賢一 2007 「続・北陸地方における貝塚のあり方－骨角器について－」『富山県考古学研究 第10号』  
(財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
- 町田賢一編 2014 『小竹貝塚発掘調査報告－北陸新幹線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告X－第一分冊 本文編』(財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
- 山内清男 1934 「貝塚は何故日本海沿岸に少ないか」『ドルメン 第三卷九號』岡書院
- 横浜市歴史博物館 2016 『称名寺貝塚 土器とイルカと縄文人』

#### 《協力機関・写真提供》

國學院大學研究開発推進機構